『國民新報』1934年3月24日

[主張]　卒業生への言葉[[1]](#footnote-1)

　やをしたものもあらう。をへて、それのへらずにへるものもあらう。またはをたゞけでのをりらうとするもあらう。これらの年をひつくるめて、とびかけて ゐることゝされたい。

　のには、のとれてのをがなくともいものもあらう。しののは、まづ一ににあるものとふ。をしなければ、あたりふにるといふもだが、のをするもまたにあるからである。のをめつゝ、のをしやうとするのが、のなのである。

　で、のは のこと、一に難の をたやうであるが、それでもり難は難である。々ふやうなが々をつてゐると いふやうなのいことは まれるものでない。これがをへた につて、もなみであることはすべきで あるにしても、しかしこのみのを にするのは、もっともつたへであつて、にあるとするのがしい である。さへ、するにる、なで あるとしたら、に難のであつても、して決してにはぐれることはないと思ふ。

　るは つた。いのなどをつて、をしるものにな はないと。〝はこんなです、どうぞ しさい″といふでやつててひたいと。これは にはふべきだとふ。のと と、これがをめるが むものであつて、いのにつてを せんとするやうなないものにはない である。のがをつたのも、はのことで、までもといふのが、の だといふことを、されたい。のとのを るは、よしんばまぐれあたりににありつくにしても、來のは ないのだ。はどこまでもののである。

　の二のみはであらう。でも、の をふのは、のとりはないが、のはののになるべきで、してを んではならない。まづのをはつきりとめて のにかゝるべきである。さへき人ならばきは□にあたるであらう。

　するに、にしても、にしても、はたまた、のに しても、籤きとつてはならない。それは籤きではなくてきなのだ。のこそ のをするものなのだ。

1. この文章は単行本『同胞に寄す』に収録されていない。この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-1)